

安住寺だより

# 禪の心

第138号

発行 安住寺 (年4回発行)

臨済宗南禅寺派

大分県杵築市大字南杵築379

〒873-0002 電話0978-62-2680

編集 矢野明玄

印刷 安住寺コピー室

HP [www.anjuuji.net/](http://www.anjuuji.net/)

## 無縁供養 説教会

22日 午後一時 卒塔婆供養

(目) 午後二時 説教

23日 午前十一時 合掌会総会

(月) 午後一時 卒塔婆供養

午後二時 説教

午後三時半 総供養施餓鬼

4月

布教師 東近江市 生連寺住職

横山玄秀師

卒塔婆供養料、一本五百円です。出

来るだけ事前の申込をお願いします。



南禅寺境内の桜

南院国師七百年大遠諱の頃には満開になっているでしょう

### 震災から一年「何も変わっていない」

あの大震災から一年経ってしまいました。一見ガレキは片付けられ、復興に向けて進捗しているように見えるが「何も変わっていない」と言う声の方が多い。

政府も第三次の補正予算を組み、震災復興関連では九兆二千四百三十八億円を計上。三月六日には、東日本大震災事業者再生支援機構、いわゆる「復興庁」が立ち上がった。いよいよ復興スピードが加速することを願うばかりです。

それにしても、政治のモタモタ振りには不満続出で

す。マニフェストに示された公約も実現できていないと、野党は厳しく追求し続けるだけです。予算の借金比率や、高速道路無料化、後期高齢者医療制度の廃止などができていません。「選挙のためのマニフェストでした」と言ってしまうと、政権を手放すことになるから言えない。現野党も非をあげつらうだけ。今、政治が何をすべきか、国民のために何が最善なのか、考えるだけでなく実践して欲しい。と、誰もが願っているのではないのでしょうか。

人が居ない訳ではない。しかし、肝心の復興計画がまともでないためとどまった。気力が萎えてしまった。と言う被災者の声も聞こえる。不安と苛立ちの一年であつたようだ。

それでも一部には帰郷を諦め、避難先や新天地で新たな仕事を見つけ、再出発した人もいる。行政の復興政策を待たず、仲間と事業を復活させた事例の報告もあつた。

そのような動きの中で、やはり感心させられるのは、日本人の生真面目さだ。

### 備えあれば憂いなし

目さど何事にも打ち勝つ忍耐力だろう。特に東北人だからかも知れないが、エールを送ると共に支援の継続を願うばかりです。

更に、最近になつて次の大地震が遠からず起こると予測をする専門家が、増えた。備えあれば憂いなしだが耐震構造に補強したばかりなのに、今度は津波の心配をしなければならなくなつた。沿岸部の電柱に、海抜〇〇mの表示を始めた。非常時用の商品が売れているらしく、津波用のカプセルも有るといふ。自分で逃げる事が出来ないなら兎も角、先ず声を掛け合つて高台に逃げることに。

# 死にがいを生きる

東日本大震災から一年を迎えた三月十一日、日本中で追悼の催しが開催され、犠牲になられた方々に対し、多くの方が哀悼の誠を奉げた。

平成十八年の「禅の心」春彼岸号に、私が修行しました多治見市永保寺の無際橋のことを書いたことがある。

こちらの岸を此岸、苦しみ多い娑婆世界に喩え、橋の向こうを彼岸、安らかな悟りの世界に喩える。無際橋を渡ることで対立の世界、苦しみの世界から救われることを願い、橋を渡るというものである。

津波を生きのび、震災に遭われた多くの方にとり、対立の際（世界）どころか、この一年は、住まいの問題、生活の糧の問題、目に見えない放射能の問題など、際限無く続く苦しみの連続で、激動の一年となり、安らかな生活を想像すら出来なかったことと思う。

彼岸を迎え、この冬は特別に

寒い冬だったことを今更ながら思い返している。被災された地方ではまだ寒さも残り、癒えぬ思いが募っている方もあろう。

地震の規模、津波の巨大さ、原発事故。想定外、想定外と何度となく聞いた一年であったように思う。しかし、本当に想定外であったのだろうか考えさせられる。

そもそも何一つ想定できない自然の中にあって、何が想定できたのか疑問である。今一度、私たちの傲慢さを反省しなければならぬ。

今年中に、世界人口は70億人になるとされている。水道の蛇口をひねれば飲料用の水が出るし、スイッチを入れれば明かりが灯り、いつでも電気を利用することが出来る。そのような国は世界中数力国でしかなく、80%以上が発展途上国であり、一日1ドル未満で生活している人が12億人いるといわれている。

今回のように、震災、津波、原発事故により家屋を失い、或

は電力をはじめとする高度文明の手段が喪失した非常時に、私たちは本来の生き方を考え、思考停止することなく、しっかりとした生命力を発揮出来るかどうか確認するチャンスだったこととは言うまでもなく、想定外を想定し新たな災害対策を構築していく一方で、想定できない自然の脅威も心に刻み力強く生きていく必要がある。その上でこの恵まれた日常に深い感謝の念を抱くべきである。

『金剛經』第三十二・應化非眞分に次の一節がある。

一切有為法 如夢幻泡影  
如露亦如電 応作如是觀



一切の有為法は、夢・幻・泡・影の如く、露の如く、また、

電の如し。  
まさに是の如き觀を作すべき。

東日本大震災によって引き起こされた巨大津波、原発事故によって改めてこの世の無常を深く感じた人は多いはずである。

そしてその後の被災された方々の姿を見れば、この世は苦しみであると説く仏の教えそのままである。

生まれながらに持っている根本の苦しみ生老病死に、「愛別離苦」愛する人と別れる苦しみ。「怨憎会苦」怨み憎む者と会わなければならぬ苦しみ。「求不得苦」求めても得られない苦しみ。「五蘊盛苦」肉体が盛んであるがゆえにそれに執着する精神的苦しみ。被災者たちは今もなお苦しんでいる。

原発から45キロ圏、福島県三春町の臨済宗福聚寺住職で作家の玄侑宗久さんは、葬儀の席で「死にがい」を説くという。

一人の人が亡くなったあと、どれだけ周囲の人が変われるかどうかであると、と説いていま

す。

また、玄侑氏の著書『しあわせの力』の中でこのように書かれています。

「日本人の生活には意識できなくなるほどに神道や仏教が浸透していると思います。意識しなくなるどころまで身につくということが、仏教や老荘思想の理想ですから、『無宗教』になっ

てしまったわけですね。…」  
仏教といわず信仰を持つ人も、持たざる「無宗教」と云われる人も、震災後どのように行動されたか振り返れば、玄侑氏の言わんとすることが理解できる。

その行動一つ一つが悟りにいたるための六つの修行「六波羅蜜」にかなっています。

＊布施・多くの方が義捐金を送り、ボランティアに足を運んだ。  
＊持戒・困難な中取り乱すことなく、助け合い秩序を守り生活されている。

＊忍辱・悲しみ、苦しみ、寒さ、人災に耐え忍ぶ姿。

＊精進・復興に向け、未来に向け全力で努め励む。

＊禪定・努め励むために、心を安定させ、日々を省みる。

＊智慧・何よりも生きていくという智慧を備えている。

人は辛く悲しいことも忘れていくように出来ているといえます。震災、津波、原発事故によって家族を亡くし家を無くし、辛く悲しい思いをされている方々の、辛い悲しい思いは一日も早く癒えることを願うばかりです。



福島県県花：ネモトシャクナゲ

東日本大震災では二万人近くの方がお亡くなりになりました。玄侑氏の言葉を借りれば、犠牲になられた方々の死を無駄にすることなく、残された遺族も、直接被害を受けなかった私たちも、東日本大震災を忘れることなく、教訓とせねばならない。

更に、恵まれた今日に感謝するとともに、想定できない自然の中に在ることも忘れず、意識しない深くしみ付いた信仰を胸に、以前とは変わったより良い命を生きていく。これが、震災犠牲者の死にがいを生きることであり、残されたものの務めであると考えます。

明玄合掌

## 東九州教区少年少女研修会

# 『寺子屋2012』開催

開催日・平成24年7月27日（金曜日）

会場・安住寺 参加無料

昨年は萬壽寺別院にて開催。うみたまご見学など。

東九州臨済宗青年層の会では、毎年夏に子供たちに心豊かな人間に成長して欲しいという目的で『寺子屋』を実施しています。今年も安住寺が会場となります。特に会所になる寺院の檀信徒の子供さんには、率先して参加して頂けるようお知らせ致します。

詳しい内容がまだ決まっておりませんが、興味のある方はお問い合わせください。

詳しい内容が決まり次第、改めてご連絡差し上げます。

**奮ってご参加ください。**

九州東教区少年少女禅の集い 平成23年7月27日

**寺子屋2011** 場所：萬壽寺別院 うみたまご



# 花祭はなまつり

お釈迦様は、生れてすぐに七歩

歩かれて右手で天を、左手で地を指さして「天上天下唯我独尊」と叫んだといひ伝えられていま

す。直訳すれば「この地球上で一番偉いのは私だ」と言う意味ですが、真意はそのような思いあがった意味では決してありません。

後世の人が、仏教と釈尊の誕生とを絡めて、仏教の大事な要点を伝える方便としたのでしよう。七歩歩かれたと言うことには、

## 天上天下唯我独尊 天にも地にもわれ一人

二つの教えが込められています。それは「六道」つまり地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上という六つの迷い苦悩の世界を乗り超えた世界（悟りの境地）へ導く教えです。もう一つは「六波

羅蜜」つまり布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六つの実践行を踏み越えた彼岸、悟りの境地に至ること



「山栖谷飲」 廣石碩田先生筆

を目的とせよと七歩歩くという形で表現したのです。また、天地をゆび指したのは「上求菩提、下化衆生」と言うことで『向上を目指して努力精進する気持ち、広く人々を救済する決意』を表した行為です。



八坂川鉄橋を渡る「白いソニック」  
土手には菜の花が満開です H24.3.15

この世に生を受けた人間にとつて、何よりも大切なものは「いのち」より他にはありません。「このかけがえのない自分の生命こそ、この世の中（天上天下）で一番尊く大切なのだ」と言うことを教えるための方便として、お釈迦さまの誕生をシンボライズしているのです。命は、自分だけのものでも有りません。先祖から受け継いだ「永遠の命」です。生きとし生ける全ての“命”をも大切にせよ。との教えが「花祭り」の行事に込められているのです。

## 安住寺 四月〜七月

# 行事予定

場合によっては変更することもあります

四月六日	独秀流御詠歌
四月八日	花祭り（降誕会）
同日午後	花祭り講演会（市仏）
同日午後	南禅寺授戒会出発
四月十四日	坐禅会（朝六時）
四月十七日	御詠歌・観音講
四月十九日	写経・写仏の会
四月二十二日	無縁供養・説教会
四月二十三日	合掌会総会・説教
四月二十八日	坐禅会（朝六時）
五月七日	独秀流御詠歌
五月十二日	坐禅会（朝六時）
五月十七日	御詠歌・観音講
五月二十二日	写経・写仏の会
五月二十六日	坐禅会（朝六時）
六月七日	独秀流御詠歌
六月九日	坐禅会（朝六時）
六月十八日	御詠歌・観音講
六月二十二日	写経・写仏の会
六月二十三日	坐禅会（朝六時）
七月六日	独秀流御詠歌
七月十四日	坐禅会（朝六時）
七月十七日	御詠歌・観音講
七月二十一日	写経・写仏の会
七月二十八日	坐禅会（朝六時）